

シモーヌ・ヴェーユにおける 感受性の基礎的研究の証明と展開

[序]

村 上 吉 男

シモーヌ・ヴェーユ（1909年—1943年）の諸作品に散見する単語のうち、筆者は *sensibilité* に着目し、それを初期の作品から順次これまでに問うてきた⁽¹⁾。ただ、そこで取り上げた作品は『デカルトにおける科学と知覚』（1930年）と『哲学講義』（1933年）にすぎなかった。

しかし、筆者の *sensibilité* の基礎的研究にとってはそれで十分なのだ。そう思えるのは、二作品に *sensibilité* の基本的なことが記されるからである、さらにいえば、彼女にあって *sensibilité* が独自の意味と用法をもつこと、それが整合した思想になっていること、それゆえ、前者から *sensibilité* の訳語は感受性が適当であること、後者から *sensibilité* がおのずと彼女の哲学思想にかかわるものでなければならないことが明かされるからである。

肝要なのはここで、感受性の基本的内容のすべてを繰返すことではなく、この基本的内容こそ二作品以降の *sensibilité* の検討の際の基礎になると主張することにある（これが *sensibilité* の基礎的研究と名付けもする大きな理由である）。換言すると、このことは *sensibilité* が二作品以降後期（晩年）の作品までに100回以上使用されようが、すでに二作品の検証において *sensibilité* が感受性と命名され整合した思想としてあるかぎり、それ以降の作品の *sensibilité* もそうした一貫性を保持する延長線上のものでしかなくなる、要するに、二作品以降の *sensibilité* はその基本的内容を踏まえるものになるということである。そして、このことがひとつの方法となって「感受性試論」を成立させ完成へと導くのだ。

筆者はこれまでさらに、二作品の *sensibilité* の基

本的内容における意味と用法が多々あることを指摘し、それらを集約させる名称、たとえば刺激や反射、外的な感受性や内的な感受性などの名称で分類しておいた。この意味と用法の多さに比例してその名称も増えるだろうが、二作品の *sensibilité* にかぎっていえば、筆者はそのあらゆる意味と用法に基づいた完全な分類を提示し得たのである。

そうすると、ここで初めて、すでに記した方法とは何かが明らかになろう。それは、二作品以降の作品にみられるだろう多くの *sensibilité* がいかなる意味と用法をもつか検証したうえで、それらのひとつひとつをこうした分類に適合させることなのだ。二作品以降の *sensibilité* に対するこの方法の導入によって、その意味と用法はそれでも、二作品の *sensibilité* のそれらに適合したりしなかったりするものとなろう。それらが基本的内容における意味と用法に一字一句同じでないにせよ、類似すると捉えられるならば、むろん分類に適合するものにみなされるだろう。

しかし、二作品の *sensibilité* の完全な分類としての意味と用法が基本的内容になるといえるにしても、それに類似する二作品以降のいくつかの意味と用法はかかる方法下において、基本的内容そのものに位置するのでは決してなく、それを重複するものでしかないと了解されるべきである。それらは初出や初見のものではないからである。

また、*sensibilité* の基本的内容に類似しないものは、この基本的内容を成立させる拠り所が二作品の *sensibilité* にあり、しかもそれ以降の作品の *sensibilité* もその延長線上にあるとみていた筆者にとって、*sensibilité* がそれまでとまったく相異したものに

らないのであって、その基本的内容を補完肉付けし、あるいはこの展開を試みさせるものと捉えるべきなのだ。sensibilité の基本的内容の補完・肉付け・展開が可能になるとなぜ予測し得るのか。それは後日の彼女の体験があるからである。

それゆえ、二作品以降の sensibilité が基本的内容の重複、その補完や肉付け、その展開をなすものだとみることは、いずれの場合にあっても、二作品における sensibilité の基本的内容の証明を示唆させることでしかない。すなわち、二作品以降のある sensibilité の解明に当たり、その基本的内容が補助的説明のために一部繰返されるようにでもなれば、二作品以降の sensibilité はその基本的内容を証明するといえる。同時に、この証明は二作品とそれ以降の作品の sensibilité が関連するものであることを明らかにし、二作品以降の sensibilité さえも確かなものとさせていくのだ⁽²⁾。

そうであれば、以上のことを検証すべく、1933年『哲学講義』以降晩年の作品中に出る sensibilité を中心とした文章が至急提示されてこなければならぬことになる。しかしそのすべてをここに引用文として掲げることが必要なのであろうか。感受性の基礎的研究の証明あるいは展開をめざすかぎり、筆者はその証明や展開に有効な文章を引用するだけでよいと判断している。有効な引用文の掲載の条件とは次のようなものになるだろう。

- (1) 取り上げる引用文はすべて、感受性の基礎的研究の証明と展開に關与するものになること。
- (2) 引用文は当然 sensibilité が出てくる文章とするが、しかしそのなかで sensibilité について説明されているか、かつそれとかかわる単語がともに見出されるかするものにかざられること。
(sensibilité が用いられても、これらの事項を満たしていない文章は引用文として提示されない。ただし、このような感受性もその基礎的研究で解明した内容を超えるのではないと理解しておかなければならない。)
- (3) 引用文はそれぞれ、感受性の基礎的研究の証明か展開かのいずれかを表わすものとして、あるいはそれら両方を含意するものとして捉えられること。(その選択肢は筆者の判断に委ねられることを予め断っておく。)
- (4) 引用文はこれまでにあって、年代順に配置さ

れること。

- (5) しかしこれから提示される引用文の年代順の配置にあっては、何より感受性の基礎的研究の証明のための引用文が優先され、その年代順の配置がなされていなければならないということ。(なぜならその証明の完了なしにはその展開がみえてこないと思うからである。)

以上から、二作品以降の諸作品にみられる sensibilité を引用文にして、その基礎的研究(その基本的内容)を証明し、続いて展開させることが筆者にとって今後長期にわたる課題になっていくが、しかし、今回はそれだけに、あるいは拙論のタイトルがこの証明と展開の序と付されるだけに、次なる問題をもう一度確認するための意味で提起し、その目新しい点のみを論じるに留めておかざるを得ないのである。

まず最初の問いは、筆者が sensibilité をいかなるものとしてみているかに関してである。これはしかし、sensibilité について他の拙論で記した説明が先きにも触れたように再度ここに語られることを決して意味しない。ここではたんに、一女生徒へ宛てた手紙(1934年?1935年?)をこの例として取り上げ、その一文が示唆するものに対して、筆者はそれこそが感受性といわれるものになると指摘しておきたいだけのことである。その一文とは彼女が「人生の現実感覚的印象ではなく、活動——思惟と行動における活動である」⁽³⁾ということである。

この短い文章で注意すべきは活動(activité)、またとりわけ行動(action)という言葉である。文意は活動が思惟と行動を含むところにあると捉えられるから、活動とはまさに人間の魂(精神)のすべてといえるほどの働きを示す言葉である。思惟はその内的なものとしての働き、行動はその外的なものに対する働きかけであり、この働かないし働きかけからおのおのが生み出されるだろう。そして当の女生徒ならば、1930年代という時代の若い人だけに、この行動をこうした巷間に流布しよう一般的な意味で受け取るにちがいない。すなわち、女生徒には行動は外的環境(外的状況)に対する働きかけとして理解されるということだ⁽⁴⁾。

しかし、今日の私たちはこの行動を一般的な意味、換言すると能動的意味としてのみ捉えようとはしていない。行動が能動的意味ばかりをもつというのであれば、彼女の表現しようとするものが註(3)の引用文には

十二分に発揮されてこないのではないかという疑問を筆者に生じさせるであろう。たとえば、行動のこの意味を前面に打ち出すと、註(3)において、一方の言葉である〈ce n'est pas la sensation〉の感覚的印象（これはいうまでもなく受動的意味になる）との比較上の均衡が失われるのではないか。いやそうではなしに、彼女は感覚的印象なる受動的意味と他方の言葉である〈c'est l'activité... dans la pensée et dans l'action〉の思惟や行動なる能動的意味（これらを含む活動もまた能動的意味をもつとみてよい）をあえて対立させておこうとしたのかもしれない。しかし、こうした相対する項目の対立がここで可能になるならば、それ以外に両方の項目がどちらも受動的意味として成り立つその対立もあってしかるべきなのである。この立場を取ると、受動的意味の両者の相違は何にあるか求められてくるし、他方の項目のうち、受動的意味を添えられる言葉とみることができるのは思惟ではなく、行動になるといえるのだ。とまれこれらのことを明らかにする彼女の次なる文章がここにおもいおこされる。

「感覚的印象は質料、空間、時間も含まず、それ自体以外何ももたらすことができず、いわば何のものでもないのだ。しかし、私たちが世界を知覚するということは、私たちにもたらされるものがたんに感覚的印象だけではないということだ」⁽⁵⁾。「運動は私たちにたえず、ひとつの変化を含む触覚、体感、痛覚ほどの感覚的印象をもたらす。しかしその変化とは質的であり、運動は量的である」⁽⁶⁾。筆者には註(5)から、受動的意味をもつものが感覚的印象以外にあり、註(6)から、感覚的印象以外のものも運動するが、むしろそれ以外のものの方が運動の運動たるゆえんをかたちづくると読むことができる。それゆえ、前段でいう受動的意味での対立の二項目として、一方に感覚的印象他方にそれ以外のものがくることになる。それ以外のものが受動的意味となるのはもはや先きの引用文を引き合わせるまでもなく、それが感覚的印象と同様、私たちにもたらされるからだ。しかし運動としては質的な変化をなす感覚的印象と相違して、それが量的な運動となってもたらされてくることになるからである。それゆえ、それ以外のものであるこの運動がこれまでに問おうとしてきた行動と置換させることが可能になるのだ。なぜなら行動は能動的受動的意味のどちらにせよ、何はともあれ運動ないしは動きの意味をもち合わせていなければならないからである。

ところで、この動きはいかなるものの運動なのであるだろうか。先きの引用文をみるかぎり、かつ行動の受動的意味を今問おうとするかぎり、かかる運動は必ずや身体の動きとなるのである。たとえば註(6)の触覚、体感、痛覚の感覚的印象は、それらの出所となる感覚諸器官や内臓から、正確にはおのおのの身体の動きからもたらされる。そこにはこれらの身体の動きばかりでなく、これらの身体を動かす刺激がくる場合もある。そして私たちはこの刺激の変化に伴う動きを感じることになる。感覚的印象以外のもの、換言すると行動の受動的意味をなすものもこれとはほぼ同様であろう（完全に同じであるといえないのはこの場合、運動なる刺激が変化でなく、度合をもたらずからだ）。それゆえ感覚的印象以外のものにおける動きにも、人間の臓器、感覚諸器官、骨格筋および身体部位の動きそのものとそれらの身体を取りまく外的環境（外的状況）との関係におけるそれぞれの身体の動きがあると考えられてよい。しかしその際、問題はこうした動きがなぜ受動的意味として理解されるのかである。それは前者にあって、この動きが意識にのぼらずともつね日頃から刺激として魂（精神）に伝えられてさえいるのであり、後者にあって、身体の動きは刺激（物）との関係でも生じるとすれば、この刺激が身体に受容され身体を動かしめるのはむしろのこと、さらにその動きが刺激として意識可能な魂（精神）に受け入れられることを示すからである。ただし、前者にいう身体の動きそのものが後者と同様、魂（精神）に意識されてその刺激になるときがある。すなわちそれは身体の動き（刺激）が量的増加をみるとき、換言すると、これが魂（精神）に意識させるほどに強く大きく激しくなって受け入れられるときである（このことはまた外的環境（外的状況）との関係でも同様にいえることなのだ）。しかし少なくとも、量的に意識に捉えられるほどの身体の動きそのものをはじめとするこの刺激であるならば、その刺激とはたとえ受動的意味でしかないにしても、もはや感覚的印象ではあり得ないといえることができるだろう。その刺激はだから筆者のみる感受性でなければならないのだ⁽⁷⁾。

さてここに至って、註(3)の引用文における行動を受動的意味に解したのは是か非かまず問われよう。筆者は行動を動きとみなし、能動的意味より受動的意味を重視して、そこに感受性をあてはめ、感受性が感覚的印象に対立させ得る比較の対象となると主張してき

た⁽⁶⁾。しかしここでそうした見方が受け入れられないとされるにせよ、身体の動きとしての感受性があると認めることについては否定できないと思うのである。註(5)において、感覚的印象以外にもたらされるものを感受性と捉えることによって、はじめて感受性が註(6)でいう量的な運動に該当するものになるし、この運動が感覚的印象の生み出されるところと同様、身体以外にないとみることによって、感受性は身体の動きとなっていないなければならないということができるといえるのだ。

前段での身体の動きが感受性となるという結語から、またひとつの問題が生じてこよう。この結語を次なる引用文、すなわち、「身体は「動くもの」「動いている存在」である。動いている存在としての人間をそれとして理解する人間の理解の仕方は、不思議なくらいに現在までなされていない。つまり動きはつねに生理的構造に還元され、神経の作用として説明されてしまうか、心の作用の結果として片づけられてしまうのが今までのやり方である。流動し、動く存在としての人間を動きとして理解する学問は今のところ存在していない⁽⁷⁾」⁽⁸⁾ということにかさね合わせてみるならば、彼女がいえばこの新しい学問となるべきものの先鞭をつけたこと、しかも受動的意味として共通性をもつが、ここで語られる身体の動きに不可欠なのは感覚的印象よりむしろ感受性であるとしたことは、これまでの諸科学や哲学思想にないものだけに、あるいは私たちが彼女の哲学思想を考えていくうえで、見過ごしにできない問題として浮上してくるだろう。

以上の二つの問題は、感受性の基礎的研究（基本的内容）が今後に掲載される引用文によって証明されたのちに、再度私的展開の試みのものとして問われるだろう。この私的展開はこれまでに素描した彼女の認識論を確立させること、同様に心身合一における精神的事象と物理的事象の関連をどのように決着させるのかの問題、さらに存在論などの新たな問題の提起へと発展していくだろう。

しかし、この拙論の最後に、私的展開のことではなしに、彼女の作品に添うところでの感受性の基礎的研究（基本的内容）の展開というものが果たしてあるのか確かめなければならぬ。この展開の代表例といってよいものは次なる引用文につきるだろう。すなわち、それは1941年の『ノート』という作品における「感受性のなかの真空こそ、感受性以上に運ぶのである」⁽⁹⁾とされる文章なのである。感受性以上は感受

性とかかわらずに生み出されないとするならば、感受性が展開されるものとみるのは当然だろう。その通りなのである。ただ、そこにどのような経緯を見出し得るかなどについては、たびたび指摘している通り、今すぐ答えを出すというわけにはならないのだ⁽¹⁰⁾。

註

(1) 新潟大学教養部研究紀要「感受性試論」〔I〕－〔VI〕（第17集－第22集）（1986年－1991年）、とくに〔IV〕－〔VI〕参照。

(2) 本文の以上の内容はあくまで筆者の方法において可能になったことである。しかしながら、この方法の導入なしに、初期から後期（晩年）までの彼女の諸作品に散見する *sensibilité* を問うことがあつてすれば、どのようなことがいえるのかここでみておく必要があろう。

その場合、筆者のどのような *sensibilité* の基本的内容なるものがあると語ってはならないだろう。本文にも記したことだが、初期の二作品のみで *sensibilité* の意味と用法がすべて出揃い、この段階で完全な分類を実現させると捉えることによって、この基本的内容そのものに該当するものが見出されるとし、それゆえそこに *sensibilité* の思想がもたらされ、その全体像もまた整合した思想になり得ると見通したのである。

今前段の初めに述べたことに従おうとすれば、初期から後期（晩年）の諸作品における *sensibilité* の証明と展開がなされることはないといわざるを得ない。たとえば、諸作品のその意味と用法がひとつひとつ検討されるにせよ、それらは、彼女独自の意味と用法とはほど遠い私たちの不断の見方でしか受け取れないばかりか、個別なもの独立したものとして処理されてしまう恐れを生じさせてこよう。*sensibilité* なる単語が相互の関連をもたないこうしたところからは、その意味と用法が証明されることはないし、まして展開されるとみることもないのである。

筆者は二作品の *sensibilité* の完全な分類としての意味と用法が基本的内容に位置づけられるものとしたが、しかし今度はここに、かかる条件をもつことのない基本的内容なるものがかりにあるとみておくなら、そのことからどういうことがいえるのか触

れておかなければならない。

その場合、筆者の見方が除外されるのだから、基本的内容は別の何らかの見方によって成り立つしかない。これはそれでも、どの作品までの *sensibilité* が検証されれば、基本的内容に達することになるのか判断し難い。それにここでは、初期から後期（晩年）の作品までのすべての *sensibilité* を対象にすること、その意味と用法のすべてを一堂に会することが課せられてくる。これは大変な作業が要求されることであるし、そうした物理的量をば一度の拙論で扱うことができないが、すべての作品の *sensibilité* を見渡せる段階では、少なくとも基本的内容に与しようとするものはみえてこよう。

しかし、現実には *sensibilité* のあまりの数のため、その意味と用法が錯綜することにおいて、基本的内容はいかなるものを基準にして構成されていなくてはならないかの見定めが困難になり、それに該当するとされるものがあるにしても、それを何らかの意図をもって基本的内容とみなすならいざ知らず、たんに収集するだけに留まるならば、その整理が十二分になされるとはとても思えないのだ。そればかりかここでは、たとえば筆者のみよとする重複、補完や肉付け、展開するものさえ基本的内容のなかに加えられることが生じてこよう。

また、*sensibilité* の意味と用法のすべてを一堂に会することにおいて、その都度の彼女の体験を通じて書かれもしよう作品でのその主張がはっきりと浮かび上がってこない、換言すると、*sensibilité* に対し、それがどこでどのようになるか、あるいは彼女がある作品にそのどんな意味と用法を込めて使用せんとするかは、作品をこの年代順にたどってこそ *sensibilité* の何らかの異同が確認されると思うのだが、これでは諸作品のその意味と用法すら同時ないしは同列に扱われる恐れ無きにしも非ずということになる。それさえも基本的内容の範疇のものにみなされたりする。そこではますます *sensibilité* の異同がみえにくくなるとともに、基本的内容があるという捉え方にもはやこだわる必要はないといってよいことになる。

とすれば、ここに、*sensibilité* の意味と用法を比較しようとする方法は見出し得なくなるといえるだろう。それゆえ、多種多様な意味と用法を証明し展開させることができないし、これらを逐一検証し

てもどこに分類することが適当なのかその際の取舍選択や整理に迷いを生じさせるにちがいない。こうなると、*sensibilité* の思想は何か、その全体像は何かを確信して論じることが到底不可能になるのだ。

しかし、確かなことは、*sensibilité* の意味と用法が、基本的内容に加えられるにしろそうでないにしろ、諸作品でその単一なるもの同一なるものとして終始語られているのではないということである。すなわち、その基本的内容があるかないかどちらにせよ、彼女は何かに立っていたといえるからこそ、*sensibilité* を補完肉付けしたり展開させたりすることを可能ならしめるように、いかなる作品においても自由に駆使することができたのである。何かとはいうまでもなく、筆者のみた基本的内容なのだ。それが初期の二作品にあらわれているというわけである。それゆえ、後期（晩年）の作品まで一度に見渡そうとする作業にあって、その *sensibilité* について語られるものなから、もし重複、補完や肉付け、展開するものを見分け取り除いて考察し得るならば、*sensibilité* に関するその見方や方法でもよいことになろうが、しかしそれならば、換言すると、筆者の見方あるいは方法と同様の結果が得られるならば、筆者の見方あるいは方法が最初から導入されてしかるべしだし、そこではこの方が正当であるとさえ断言できるように思われるのである。

- (3) 《La réalité de la vie, ce n'est pas la sensation, C'est l'activité — j'entends l'activité et dans la pensée et dans l'action.》『Lettre à une élève』——『La Condition ouvrière』Simone Weil, Gallimard, P. 25
- (4) この段落の内容については、『感情』（戸田正道著、東京大学出版会、P. 22）を参照した。「本書では「活動」という言葉と「行動」という言葉を必ずしも厳密ではないが一応次のように使い分けることにする。すなわち、「活動」は内的外的を問わず人間の心の働きすべてを意味し、「行動」は主として外的環境に対する働きかけとしての心の活動を指す。」
- (5) 《Elles (les sensations) ne contiennent ni une matière, ni, un espace, ni un temps, et ne peuvent rien nous donner en dehors d'elles-mêmes, et en quelque sorte elles ne sont rien, Cependant nous percevons le monde : C'est donc que ce qui nous est donné, ce n'est pas

seulement les sensations, 》(括弧内筆者)
『Leçons de philosophie』 Simone Weil, Plon,
P. 43

(6) 《Le mouvement nous procure toujours des sensations de l'ordre du toucher, de coenesthésie, de douleur, qui impliquent un changement. Mais le changement est qualitatif, le mouvement est quantitatif. 》 Ibid; P. 39

(7) この段落の内容については、『認識し行動する脳——脳科学と認知科学——』(伊藤正男・佐伯胖編, 東京大学出版会, P.P. 45-46)を参照した。「行動ということばのそもそもの語源については今さだかでないが、「行い」「動く」ということの合成語であることにはまちがいないであろう。そもそも行動は「動物」すなわち、「動くもの」とともに考えられたものであろう。……人間の場合には, 人間の内臓, 感覚器官, 骨格筋および身体部位の「動き」は, すべて行動に含まれる。要するに身体の「動き」すべてに行動の名称が用いられる。一方, 行動はこのように身体の動きそのものみに注目して成り立つのではない。それはつねに身体をとりまく外界の状況との関係で考えられるものである。たとえ, 胃の蠕動のように純粋に内臓そのものの動きと見えるものであっても, 胃に入ってきた食物という外界からの刺激物によって起こるものである。外界と身体部位の動きとの関係にはそれぞれ濃淡があるとしても, 基本的には外界あるいは環境との関係を含んで, 行動は成立していると考えべきである。なお, さらにいうならば, 身体の動きは刺激との関係によって生じているが, 身体の動きそのものが刺激になるということも考えの中に入れておく必要がある。」

(8) 註(3)の引用文に感覚的印象, 思惟, 行動と記されることにあって, 意味の具体性に乏しい言葉は行動である。この行動の意味を検討し, 本文の内容に達したわけである。一女生徒への手紙は註(5)や註(6)の引用文よりのちに書かれたものであって, そこには感受性なる考えが潜み暗示されていると解釈することも可能なのだ。しかしここで彼女が感受性とせずに行動と記したのは, おそらく女生徒ということへの配慮が働いたからではなかろうかと思われる。

ところで本文に述べたことに関し, 以下で次なる点を補足しておきたい。まず, 受動的意味(刺激)の感覚的印象に対立させられるとする能動的意味と

しての思惟と行動の方はいわゆる反射といわれるものになろう。ここで行動を感受性に置換しても, これまでの拙論での指摘の通り, 感受性は閾値後に反射としての機能をもつから, 受動的意味対能動的意味という対立もしくはその項目は成立することになる。(脳(魂あるいは精神)に局在する(内的なものの)思惟(知性)の能力はつねに能動的意味(反射)の機能でしかない。そして今みたように, 他方での反射としての感受性(内的なもの)を含むのが活動なのである。それはそうとして, 註(4)の解説に活動は内的外的を問わずとあるが, この際の外的(なもの)はいわずして明らかな通り, 受動的意味(刺激)としての行動(感受性)である。それゆえ行動(感受性)は外的なものに関与するのだから, 活動は内的外的を問わないといってよいのだ。)

また, 行動を受動的意味と理解し, 一方のその感覚的印象と対立させる場合, 行動は刺激なる感受性となって, しかも質的な感覚的印象に対し量的な感受性として比較されよう。行動を受動的意味と理解しても, この行動に感覚的印象を置換させあてはめようとするには到底できない。なぜなら感覚的印象同士の対立もしくはその項目が成り立つことなどないからであり, 感覚的印象を非常に嫌悪し否定する彼女にあって, それを行動とみなすことは絶対ないからである。

ただ, 筆者は受動的意味(感覚的印象)対受動的意味(感受性)の対立項目のなかに能動的意味における思惟を含ませてみてはいない, すなわち, 受動的意味(感覚的印象)対能動的意味(思惟)と受動的意味(感受性=行動)という対立項目を前提にしてはいないと断わっておく。彼女の見方に従えば, 思惟は感受性なしには生まれえない, 換言すると, 思惟は受動的意味(刺激)なる感受性が反射するところにおいてこの反射なる感受性と結合されて成立するということであるから, これは思惟との関係を保持するにはもはや感受性が受動的意味(刺激)ではあり得ないこと, 要するに感受性が能動的意味(反射)になっていないと思惟とは無関係に陥ることを意味する。それゆえ, 思惟と関係するうえでは, 受動的意味(感覚的印象)に対する対立項目がどうしても能動的意味として捉える思惟と感受性になってくるのであり, 決して, 受動的意味(感覚的印象)対能動的意味(思惟)と受動的意味(感受性=行動)

という対立項目は設定されることがないといえるのだ。たとえこれが設定されたとしても、そこでは彼女が註(3)で女生徒に強調するような活動を実現することは不可能である。思惟と行動を含む活動にあって、その行動は本来能動的意味を保有していなければならないのだ。ここでの対立項目のなかの行動は受動的意味におけるそれになっている。こうした活動は彼女のいう活動にはならないかぎり、対立項目に必然性がないといってよいし、当然これ以上感覚的印象や思惟について問うこともないが、筆者は受動的意味にあっては感覚的印象より感受性を受け入れ、能動的意味にあっては思惟より感受性を発揮さ

せる（これは肉体労働を課して可能になろう）方こそ、註(3)で彼女のいうところの活動また行動の真の意味であり、人生の現実につながるとみたい。

(9) 『認識し行動する脳——脳科学と認知科学——』（伊藤正男・佐伯胖編，東京大学出版会，P. 46）

(10) 《C'est le vide dans la sensibilité qui porte au-delà de la sensibilité.》『Cahiers II』Simone Weil, Plon, P. 129

(11) 註(10)についてはすでに註(1)で取り上げた「感受性試論」の〔I〕P. 14, 〔II〕P. 23において素描している。